２０２３年１０月８日（聖霊降臨後第１９主日、特定２２、A年）
牧師メッセージ
「我々のものにしよう」
（マタイによる福音書21:3-43）

司祭ヨセフ太田 信三

先週に続き、今日の福音の主イエスの対話相手は祭司長や長老たちです。今福音書を読むわたしたちには、殺された息子＝イエスさまかとピンときますが、彼らはそれも分からず、他人事としてこの話を聞いたことでしょう。

「一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した」とあるように、農夫たちの残忍さはエスカレートしていきます。そしてついに「相続財産を我々のものにしよう」と、主人の期待は完全に裏切られます。人は不安や恐れから逃れるために、人から奪ってでも安心を得ようとします。そのために、はじめは「少しならば」と他者よりも多くを得ようとする。しかし気がつけば、「まだ足りない、まだ足りない」と大きく奪う。心が徐々に麻痺してしまうのです。その結果がわたしたちの生きている「奪い合う」世界です。けれども残念ながら、他者を顧みず自らの幸いや安心だけを求めるなら人は離れていき、結局は愛に飢え、孤独の苦しみに至ることでしょう。だからこそ、礼拝で毎回わたしたちは唱えます。「すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主に捧げたのです。」他者の命も、自分の命も神さまのものだからこそ、大事にできるのです。日々いただく糧も神さまからの賜物。それを持ち寄ることで、より良い実りがもたらされます。奪い合うことはむしろ貧しさに向かってしまいます。それにしても、「我々のものにしよう」という農夫たちの言葉はゾッとするものです。そして実際に「自分のものにしたい」という人間の思いは強力です。どんなに礼拝で唱えても、教会を一歩出れば「我々のものにしよう」という思いに支配された世界でわたしたちは生き、引き寄せられてしまうのです。

主イエスはそういうわたしたちのために十字架にかかってくださいました。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。」とあります。これは、祭司長や長老たち、そしてわたしたちの欲望の末に殺された主イエスこそが、隅の親石となり、まことの救い主となる、ということです。わたしたちもまた、祭司長、長老たちと変わらず、自らの悪さには気付かないものです。そんなわたしたちのために主イエスは十字架にかかってくださいました。十字架上の主イエスの姿を見つめましょう。最も尊い方が、十字架の上で両腕を開いて、すべてを手放して死んでくださっています。あのお姿こそが、他人から奪ってでも自分のものとしたいというわたしたちの奢りや傲慢さを打ち砕き、謙遜さをもたらしてくださいます。奪い合うのではなく、手を開き、与え合うことです。

十字架を見つめ、「すべてのものは主の賜物」であることに立ち帰り、奪い合うのでなく、分かち合う、与え合う生き方へと変えられましょう。そして、この奪い合う世界へと派遣されていきましょう。